朝臣源頼光贈馬三十匹以頒賓客世傳以爲宴集盛事前是所無也夫頼光時爲東宮大進其職小也其祿薄也而有馬三十匹何哉使當時公卿有虞天下國家者可不加之意乎蓋公卿大夫以恬熙爲務嬾衣甘食漁色鬬歌而捕盜討賊之事委之武臣世官者曰是賤事耳而不省地方兵馬之富漸歸其手他日平治建久之勢隱然已胚胎於此而舉朝莫能察徒以資誇談焉果無人故也則其所謂才者可知已兼家子道長更極專擅家出三后身爲兩朝外祖嘗咏歌其意曰此世吾之世也嗚呼何知二百年後代有此世者更有其人哉

〔古事談一王道后宮〕三條院御時入道殿〔藤原道長〕參給被申請事等不許攀緣令退出給以敦儀親王喚之親王於小板敷乍立告勅喚之由入道殿歸參云如此之生宮達立板敷上召執柄人乎云々經任卿說云不歸參給罵宮達直出給云々

〔大鏡五太政大臣伊尹〕このおとゞ、一條攝政と申き、〔略〕中御門〔冷泉〕の御をぢ、東宮〔花山〕の御おほぢにて攝政せさせ給へば、世の中はわが御心にかなはぬ事なく、くわさことのほかにこのませ給ひて、大饗せさせ給ふに、寢殿のうら板のかべすこしくろかりければ、俄に御らんじつけて、とかくみちの國の紙をつぶとおさせ給へりけるが、なか〳〵白くきよらに侍ける、おもひよるべき事かはな、御家は今の世尊寺ぞかし、御ぞうの氏寺にておかれたるを、かやうのついでにはたちいりて見給へれば、まだその紙のおされて侍るこそ、むかしにあへる心ちしてあはれに見給へれ、かくやうの御さかえを御らんじおきて、御年五十にだにたらでうせ給へるあたらしさは、ちゝ大臣〔藤原師輔〕にもおとらせ給はずとこそ、よ人をしみたてまつりしか、

〔大鏡七太政大臣道長〕太政大臣道長おとゞ、法興院おとゞ〔藤原兼家〕の御五男、御母從四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣女なり、この朝臣は從二位中納言山蔭の卿七男なり、この道長大臣は、今入道殿下これにおはします、一條院三條院のをぢ、當代〔後一條〕東宮〔後朱雀〕の御おほぢにておはしま